

パネル・ディスカッション提案 1

読書カリキュラム編成の原理について

有 沢 俊 太 郎

一 国語科における教科内容についての基本的な立場

これまで国語科の教科内容と言うと国語教科書を中心とした文章が代表的なものでした。これは間違いではありませんが、これに、文章に対する子供の反応を加えた、その総体が国語科の教科内容と考えることが基本にならなければなりません。

かつて、教育実習を見ていたとき、一年生の子供が()のよ
うに読むのを聞きました。

きつつきの くちばしは、さきが とがって います。きつつ

きは、この くちばしで、木の みきを つついて (ついで・

つつついて) あなを あけます。

「つく」と「つつく」は漢字で書けば同じだけれど、語感随分違います。チャド曙は「つく」のであって、「つつつく」のではありません。彼は「つつばる」かもしれないけれど、「つつつく」わけではありません。子供の読みは豊かな教材になりうる可能性を秘めています。そして、子供があんな風に読んだ背景には、相撲が関係するかどうかはわからないけれど、彼(彼女)なりの生活とのつながりがあるはずですよ。

教科内容編成の原理はこのような教科内容観からスタートしなければなりません。それが子供の言語生活に根ざすカリキュラムとな

っていきます。

二 編成の実際について

私などの学生院生の時代は、カリキュラムの編成権について激しい議論がありました。それは、東西の冷戦構造のなかで、左右の思想的な対立の下で行われました。しかし、今はベルリンの壁も崩壊して、このようなことが問題となる状況ではありません。「誰が」よりも、「何を」「どのように」編成するかが重要な問題になっていると言えます。そこで重要なのが先に述べた教科内容に関する基本的な立場です。

三 新潟県下保倉小学校における読書カリキュラムの編成

私はこの小学校にここ三年間かかっています。文部省の読書指導研究校の指定を受けたのがきっかけで、この学校に通うようになりました。学校は直江津と越後湯沢を結ぶ新線「北越急行」(通称ほくほく線)沿線にあり、初めて訪問したときから、地域や風土との絆の深さを感じました。これは、かつてイギリスで見聞した初等学校の記憶を呼び出し、手元の関係文献を調べて次のような三つの読書カリキュラムを考案しました。それは、

1 READING ACROSS THE CURRICULUM

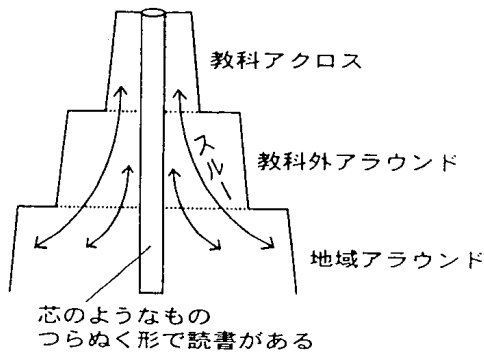
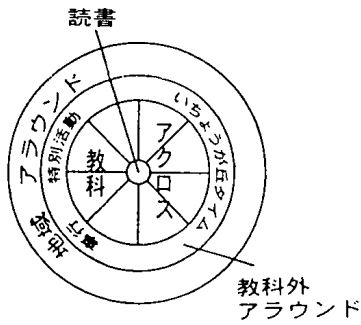
2 READING AROUND THE CURRICULUM

3 READING THROUGH THE CURRICULUM

です。具体的には、順に、1 「教科、教科間学習」、2 「教科外(周辺)学習」(いちちようが丘タイム)、3 「総合読書学習(家庭、地域との連携)」となります。各カリキュラムの特徴は、

- 1、アクロス・言語的テキスト、テキスト相互のコンテキストに支配される。国語科は最もテキスト内の。横断的にクロスしながらテキスト相互に広がる。
- 2、アラウンド・教育的場面のコンテキストに支配される。コンテキスト形成の要因は、「話題題材」(Field)と「参加者」(actor)と「言語活動の様式」(mode)である。
- 3、スルー・生活的、文化的価値が生み出すコンテキストに支配される。生活の実感から湧き上がる内容的価値の重視。縦断的にクロスする。

です。このように、三つのカリキュラムは重点の置き方は違います



が、「読書」(言語による人間形成)ということによって一体的にとらえられます。「読書」はコア(芯)にあります。他から隔離されているわけではなく、各カリキュラムに破れ出て生きているものだからです。(図参照。下保倉小学校『本とともだち』平9より)

四 編成の原理について

以上、私は教科内容についての基本的な立場を踏まえて、その編成を言語カリキュラム論として考えてきました。この場合は SYSTEMIC FUNCTIONAL APPROACH をカリキュラム論に適用しました。カリキュラム論は、固有の学術的な原理を持っていないと、すぐ一部権力の意のままになってしまいます。日本の場合は上からのカリキュラムが強すぎ、それは一で述べた私の基本的な考え方に合わない面があります。これが今日の私の真意です。カリキュラムは所与のものではなく、子供の学習の実態から生成する一面を持っています。もちろん、公教育としての大きな動かない枠組みは必要でしょう。しかし、その枠は空隙を含み、そこでは地域や家庭の特性を生かした独創的なカリキュラムが編成されてしかるべきだと考えます。

反面、編成者の責任は重くなる。たった一つの考え方を伝達していれば楽で仕方がないが、常に編成主体の考えが問われ、カリキュラム点検など自己評価が必要になるだろうと思います。

〈参考文献〉1. UKRA: READING THROUGH THE CURRICULUM (Heinemann, 1983) 2. R. Melrose: THE COMMUNICATIVE SYLLABUS: A Systemic-functional Approach to Language Teaching (Pinter, 1991)

(上越教育大学)